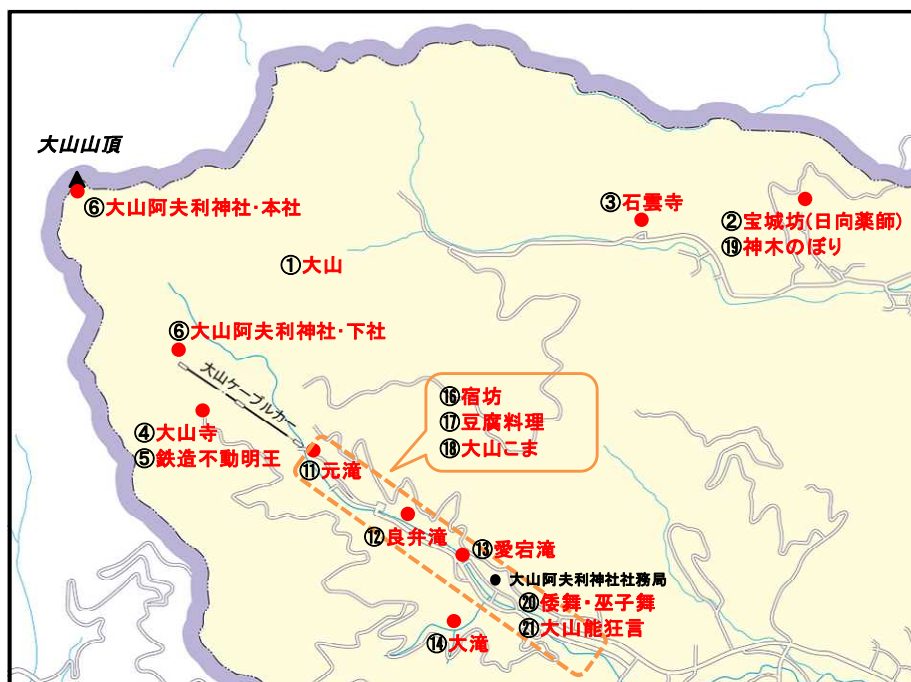
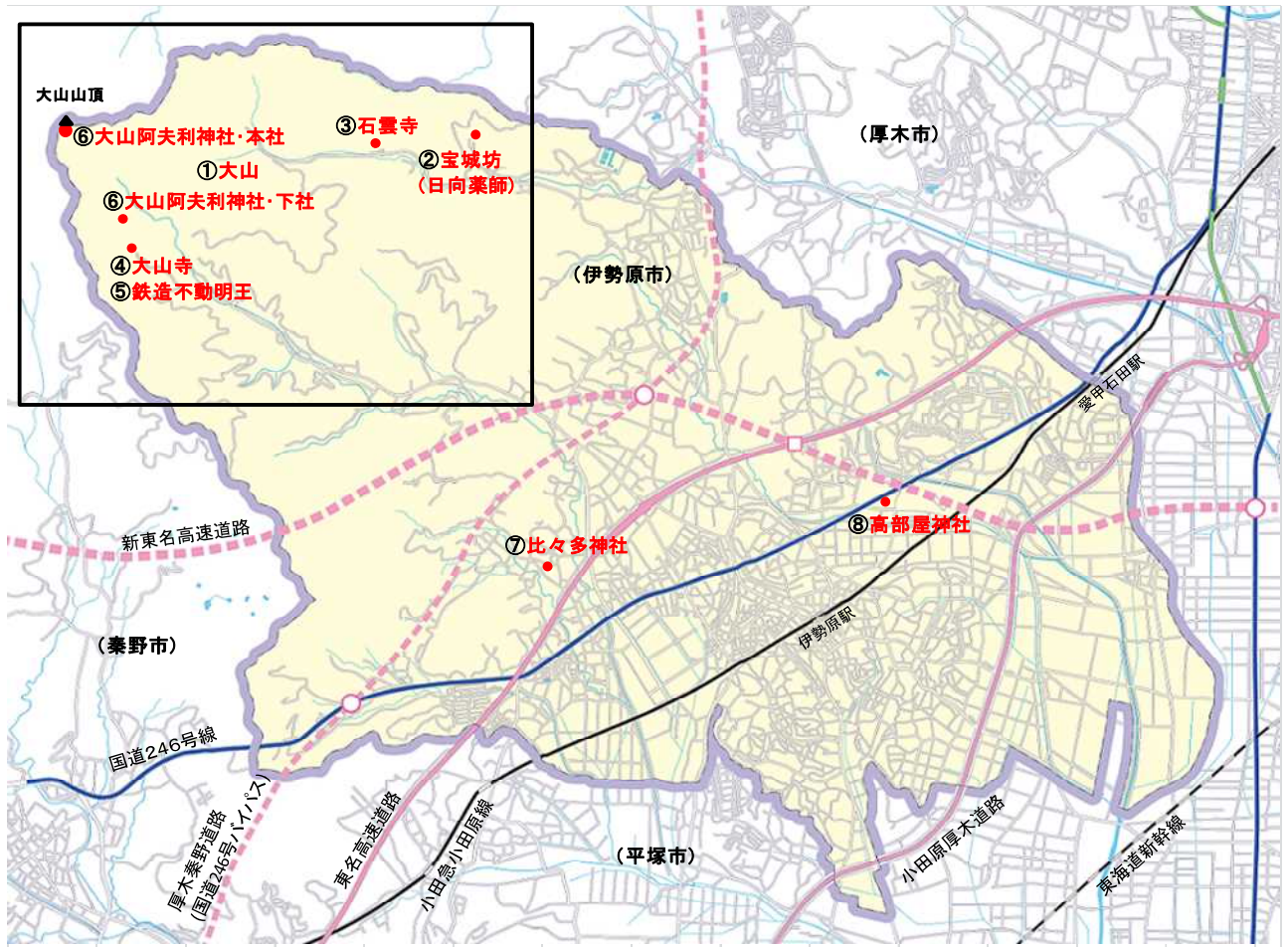


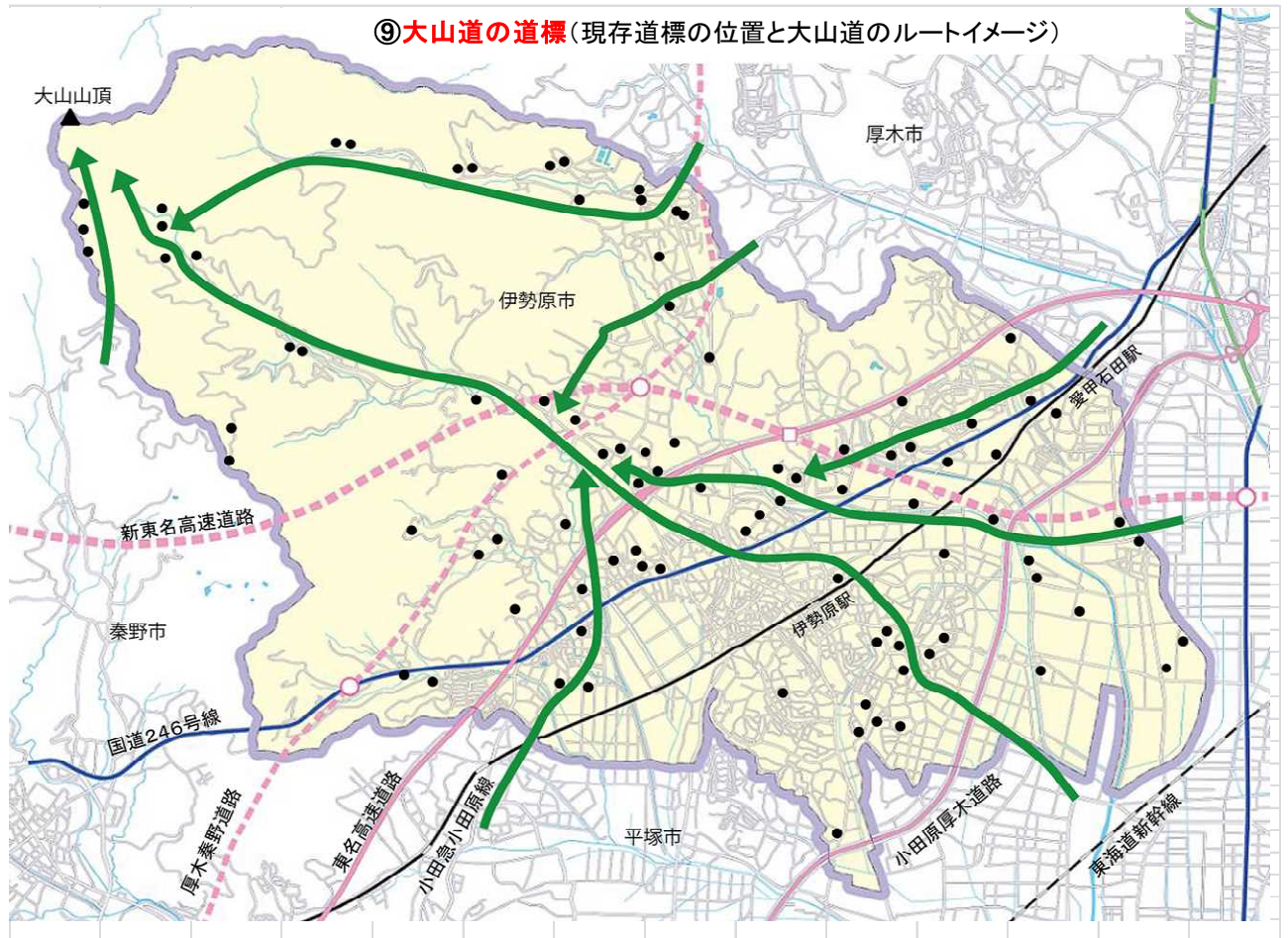
① 申請者	伊勢原市	② タイプ	地域型 / シリアル型 (A) B C D E	
③ タイトル				
江戸庶民の信仰と行楽の地 ～巨大な木太刀を担いで「大山詣り」～				
④ ストーリーの概要（200字程度）				
<p>大山詣りは、鳶などの職人たちが巨大な木太刀を江戸から担いで運び、滝で身を清めてから奉納と山頂を目指すといった、他に例をみない庶民参拝である。そうした姿は歌舞伎や浮世絵にとりあげられ、また手形が不要な小旅行であったことから人々の興味関心を引き起こし、江戸の人口が100万人の頃、年間20万人もの参拝者が訪れた。</p> <p>大山詣りは、今も先導師たちにより脈々と引き継がれている。首都近郊に残る豊かな自然とふれあいながら歴史を巡り、山頂から眼下に広がる景色を目にしたとき、大山にあこがれた先人の思いと満足を体感できる。</p>				
⑤ 担当者連絡先				
担当者氏名	伊勢原市教育委員会 教育部 歴史文化推進担当部長 山口 譲 文化財課長 立花 実			
電話	0463-94-4711	FAX	0463-95-7615	
E-mail	bunkazai@isehara-city.jp			
所在地	〒259-1188 神奈川県伊勢原市田中 348			

市町村の位置図（地図等）



構成文化財の位置図 (地図等)





ストーリー

大山^{おおやま}への信仰は古く、奈良時代には、霊山寺^{りょうぜんじ}（現・宝城坊。通称・日向薬師）、石雲寺^{せきうんじ}、大山寺^{おおやまでら}が開かれ、平安時代にまとめられた「延喜式神名帳」^{えんぎしきじんみょうちよう}に記される阿夫利神社^{あふり}や比々多神社^{ひびた}、高部屋神社^{たかべや}の成立などにより、信仰の地としての姿が整えられていった。大山は別名を「雨降山（あめふりやま）」と呼ばれるなど、雨乞い、五穀豊穡、商売繁盛を願う多くの庶民が「大山詣り」^{おおやまい}に訪れた。しかしながら、人々を惹き付けたのは神仏の御利益^{ごりやく}だけではなかった。



1. 大山詣りを仕掛けた御師の生い立ち

戦国時代末期の天正 18 年(1590 年)、豊臣秀吉の軍勢により北条氏が滅ぼされた戦いにおいて、大山の修験者^{しゅげんじや}たちは武装し北条氏と共にいた。その後、江戸近郊に僧兵の武装勢力があることに危機感を持った徳川家康は、大山を純粋な信仰の地とするため山内改革^{さんないかいかく}を行い、寺領を寄進し経済的な支援をする一方で、修験者や妻帯している僧侶たちを大山寺から追放した。

家康に下山を命じられた者たちはその信仰心を断ち切らず、生き残り策として中腹で神殿を備えた宿坊を営む御師となった。御師たちは、宿坊や土産物屋を営みながら、年に 100 日以上にわたり関東一円の檀家を廻って御札^{おふだ}を配り、初穂^{はつほ}を集め、大山寺に祀られる「不動明王」^{ふどうみょうおう}と山頂に祀られる「石尊大権現」^{せきそんだいこんげん}の霊験を広める地道な布教活動に励んだ。



2. 信仰と行楽を兼ね備えた大山詣り

(1) 庶民の遠出を叶えた大山講

大山は、関東一円どこからもその神秘的な容姿を望むことができ、江戸方面からは富士山とともに眺めることができる。当時、富士詣りも人気があったが、富士へ行くには少なくとも 7 日を要し、箱根の関所を通る手形が必要な大旅行であった。一方、大山詣りは、関所も通らず、帰りがけに江ノ島や金沢八景を経由しても 3 日か 4 日程度といった観光を兼ねた小旅行であった。

しかしながら、いかに江戸から近い大山詣りとはいえ、1 人での参拝となると費用の工面は困難であった。そうしたことから、同じ職種の職人同士や今でいう町内会を単位とする大山詣りを目的とした講を組織し、費用をみんなで積立て順番制で大山に向かうといった仕組みを作り上げた。御師たちの熱心な布教もあり、関東一円をはじめ静岡、山梨、長野、新潟、福島に広がり、最盛期には 100 万戸を超える檀家がいた。

こうして、江戸から距離的に近い利便性と大山の歴史的由緒を生かし、霊験あらたかでありながらも、厳しい修行や戒律を伴わない、気軽な信仰と行楽を兼ね備えたものとして大山詣りはできあがっていった。

(2) 納め太刀を担ぎ「いざ！大山へ」

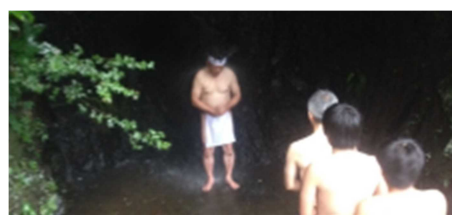
関東一円から大山へと続く道は「大山道」^{おおやまみち}と呼ばれ、江戸を出立した参拝者たちは相模湾を左手にして、はるか向こうの富士山が背後に見える大山を目ざし、要所にたてられた石造りの道標^{どうひょう}をたどりながら楽しげに歩を進めた。大山講の一行、いわゆる講中^{こうちゆう}が江戸から肩に担いで運んだ巨大な木太刀は、源頼朝が武運長久を祈願して自分の刀を大山寺に奉納したとされることに由来し、参拝に際して奉納する納め太刀である。庶民による参拝では他に例をみない、唯一大山詣りで行われたものである。



幅広い人々に親しまれた大山であったが、日頃高い所での仕事が多く、遠くに見える大山に特別な感情を抱いていた鳶や大工、火消しといった職人たちでつくる講も多くあった。こうした職人たちは水や石への縁起を担ぎ、「雨降山（あめふりやま）」の名や山頂の「石尊大権現」にあやかっ御利益を求め参拝に訪れ、粋にこだわりを持つ講中同士が競い合ううちに納め太刀も徐々に大きくなり、7メートルに及ぶものも奉納されている。また、参拝者の中には、ばくちに負けて借金取りから逃げるように大山詣りをした者もいた。納め太刀には、五穀豊穰、商売繁盛などの願いとともに庶民の武運長久とも言える勝負運を上げる意味も込められていた。

(3) 歌舞伎や浮世絵の題材となった大山詣り

参拝者たちは中腹にある滝に打たれ身を清める滝垢離たきごりをしてから登拝する。粋な職人たちにとっての滝垢離は、互いに彫りものを披露し合う大山詣りならではの舞台でもあった。こうした姿をはじめとして大山詣りに多くの人々が関心を寄せていたことから、歌舞伎や浄瑠璃、落語、川柳などに取り上げられ、また、参拝者たちが大山に向かう道中の様子や、歌舞伎役者がふんずける彫りものの姿で大きな納め太刀を手にして滝に打たれる姿などを描いた浮世絵が売り出されたこともあり、更に多くの人々の興味や関心を呼び起こし、江戸の人口が100万人であった頃、年間20万人もの参拝者が大山を訪れている。



(4) 参拝客をもてなす宿坊と麓の繁栄

参拝の講中を歓待する宿坊は、講の所在地とその名称が刻まれた玉垣たまがきに囲まれ、玄関先に並ぶ登拝記念の石碑や奉納された手水鉢ちょうずばち、講の名を刻み込んだ板まねきや布に染め抜いた布まねきが御師とのつながりの強さを表し、帰宅した家族さながら講中を出迎える。

御師たちは、参拝客の宿泊から登拝の道案内まで一切の世話をし、宿坊に備える阿夫利神社の分霊を祀る神殿で、登拝する講中の無事を祈願した。

大山の名物となっている豆腐料理は、各地の講から奉納された大豆を利用し地元の清水でつくったのが始まりで、宿坊ごとにそれぞれの講から預かる専用の器を用いて振る舞われた。また、地域の木地師により作られた大山こまは、金回りが良くなるという縁起物で、参拝客が帰宅の際に買い求め、誰からも喜ばれることから、御師も檀家廻りの際に土産代わりに持参していた。

大山の麓も大山詣りの恩恵にあずかり、往来する参拝者を相手とする商いはもとより、宿坊で必要となる布団や履物から日用品、酒や食料品などの取引で繁盛した。

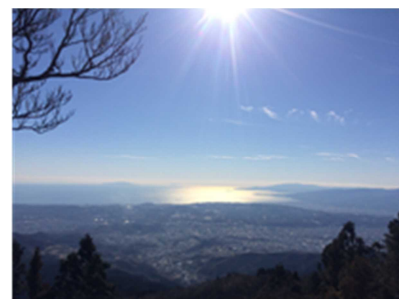


3. 今に息づく庶民信仰と神秘的な魅力

大山詣りは先導師せんどうし（当地では明治の神仏分離を契機に御師を改称）により脈々と引き継がれ、今も先導師の道案内で登拝する白装束に身を包んだ大山講の一行や古くから伝わる様々な祭事を目の当たりにすることができる。

宿坊や参道沿いに軒を連ねる茶店や土産物店では、当時の風情を感じることができ、もともと精進料理であった豆腐料理や猪、山菜といった地元の食材を使った食事を楽しめる。

首都近郊に残る豊かな自然とふれあいながら歴史を巡り、山頂から眼下に広がる雄大な景色を目にしたとき、大山にあこがれた先人たちの思いと満足を体感できる。



ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
①	おおやま 大 山	未指定	<p>都心から約 50km、神奈川県西部、丹沢山地の東麓に位置する標高 1,252m の山。以東には筑波山まで高い山がないことから、関東一円から山容を望むことができる。</p> <p>古くから山岳信仰の地として崇められ、山頂からは約 5,000 年前の縄文土器や古墳時代の土器、祭儀に用いられたと思われる平安時代の鏡などが発見されている。</p>	
②	りょうぜんじ 霊 山 寺 ほうじょうぼう (現・宝 城 坊。 ひなたやくし 通称・日向薬師)	国重文(本 堂・建造物)	<p>霊亀 2 (西暦 716) 年に行基により創建されたと伝わる寺。神仏分離を契機に宝城坊となる。</p> <p>暦応 3 (西暦 1340) 年鑄造の銅鐘(国重文・工芸品)には、初代の鐘が天暦 6 (西暦 952) 年に村上天皇の発願によって造られたことが記されており、厨子(国重文・建造物)に納められている本尊の鉦彫薬師三尊像(国重文・彫刻)も同時期の作とされる。平安時代末から鎌倉時代にかけての作とされる木造薬師如来坐像(国重文・彫刻)、木造日光・月光菩薩立像(国重文・彫刻)、木造阿弥陀如来坐像(国重文・彫刻)、木造四天王立像(国重文・彫刻)などの仏像も祀られている。</p> <p>当寺には、源頼朝や妻の北条政子も参拝しており、直径約 1.4m の大太鼓(県有形民俗)は頼朝の奉納と伝えられている。</p>	
③	せきうんじ 石 雲 寺	未指定	<p>寺伝により養老 2 (西暦 718) 年の開創と伝わる寺。</p> <p>雨降山の山号をもつ元華嚴宗の寺院で、壬申の乱で敗れた大友皇子を祀る。</p>	
④	おおやまであ 大 山 寺	未指定	<p>大山詣りで納め太刀を奉納した寺。</p> <p>天平勝宝 7 (西暦 755) 年に奈良東大寺の長官であった良弁僧正が、聖武天皇の命により開創したとされ、平安時代末の木造不動明王坐像(県重文・彫刻)を祀り、鎌倉時代作の鉄造不動明王像(国重文・彫刻)を本尊とする。</p> <p>明治の神仏分離までは現在の大山阿夫利神社の下社がある位置にあり、江戸時代には徳川家康、家光ら幕府の後ろ盾により、本堂をはじめとする大規模な建物群が造営されていた。</p> <p>明治の神仏分離により廃寺となるが、熱心な信者の力により明治時代中頃に本堂が現在の地に再建され、当時は明王寺と称していたが、大正時代になって大山寺として再興された。</p>	

⑤	てつぞうふどうみょうおう 鉄造不動明王 にどうじぞう 及び二童子像	国重文(彫刻)	大山寺の本尊であるこの不動明王への参拝が大山詣りの目的のひとつであった。 鎌倉時代に願行上人により造られたとされる鉄仏で、荒々しい力強さが多くの信仰を集めた。	
⑥	あふりじんじゃ 阿夫利神社 おおやま あふり (現・大山阿夫利 じんじゃ 神社)	未指定	山頂に石尊大権現を祀る延喜式神名帳に掲載されている神社で、大山寺とともに、大山詣りの目的地のひとつであった。 長く神仏混淆の状況が続いたが、明治政府の神仏分離政策により大山寺が廃されると、大山寺の不動堂(本堂)跡地に阿夫利神社の下社が建立され、山頂には本社が建てられた。	
⑦	ひびたじんじゃ 比々多神社	未指定	持統 5 (西暦 691) 年に相模国の国司がこま犬(市指定)を奉獻したとの伝承があり、相模地域屈指の副葬品を有する古墳に囲まれるように建つ延喜式神名帳に掲載されている神社。	
⑧	たかべやじんじゃ 高部屋神社	未指定	延喜式神名帳に掲載されている神社で、平安時代に大山一帯を含む糟屋荘を支配した、糟屋氏のゆかりと伝えられている。	
⑨	おおやまみち どうひょう 大山道の道標	未指定	各地からの参詣者を大山へと導いた石造りの道標。側面には「大山道」と彫り込まれ、大山にちなんで不動明王を載せているものもある。 大山へと向かう道は、柏尾通り大山道、田村通り大山道など、主要なものだけでも 8~10 のルートがあったとされる。現在も、市内には多くの道標が残されている。	
⑩	おさ だち 納め太刀	未指定	大山詣りに講中が江戸から担いでくる木太刀。源頼朝が武運長久を祈願して自分の刀を大山寺に奉納したとされることに由来し、この木太刀に願いを書き、大山寺や山頂の石尊大権現に奉納した。 木太刀は当初 30 cm ほどであったが、中には 7 m を超えるものも納められるようになった。	
⑪	もとだき 元 滝	未指定	大山詣りでは、大山山内に数箇所ある滝で滝垢離を行い、身を清めた後に登拝することがならわしであった。 現在も、当時、滝垢離で使われた滝が残されている。	
⑫	ろうべんだき 良 弁 滝	未指定		
⑬	あたごだき 愛宕 滝	未指定		
⑭	おおたき 大 滝	未指定		

⑮	<p>おおやま 大 山 や大山詣り の様子が描かれた 「浮世絵」 (伊勢原市教育委 員会所蔵)</p>	未指定	<p>うたがわひろしげ ○歌川広重「五十三次名所図会七南期(湖)左り不 二」安政 2 (西暦 1855) 年 =東海道から見える富士山と大山が描かれてい る。 ぜんぼくさいいつ かつしかほくさい ○前北斎為一(葛飾北斎)「諸国瀧廻り 相州大山 ろうべんの瀧」文政末頃 =良弁滝での滝垢離の様子が描かれている。 ごうんていさだひで ○五雲亭貞秀「相模国大隅郡大山寺雨降神社真 景」安政 5 (西暦 1858) 年 =大山の入口から山頂石尊社までの大山寺境内地 と、さらに富士山、高尾山、江ノ島、伊豆半島 など、大山から見える名所を描いている。 ごうんていさだひで ○五雲亭貞秀「大山良弁図」元治元 (西暦 1864) 年 =参詣者の滝垢離でにぎわう良弁滝の様子が描か れている。 うたがわよしとら ○歌川芳虎「大山石尊大権現(仮題)」文久 2 (西 暦 1862) 年 =大山を背景に、中央に鈴を持った歌舞伎役者の 中村芝翫、右に提灯を掲げた坂東彦三郎、左に 「石尊大権現」と朱文字で書かれた木太刀を持 つ河原崎権十郎が描かれている。 うたがわよくに ○歌川豊国「大當大願成就有が瀧壺」文久 3 (1863) 年 =「奉納大山石尊大権現 大天狗 小天狗 天下泰平 国土安穩講中安全」と書かれた大きな木太刀を 持つ男など、7 人の役者がふんする粋な参拝者 が滝垢離する姿を描いている。 とよはらくにちか ○豊原国周「見立水滸傳當瀧壺」慶応 3 (西暦 1867) 年 =歌舞伎役者の市川団十郎が滝を背景に諸肌脱い で、納め太刀を持った姿が描かれている。 ほか</p>	
⑯	<p>参道沿いに建てら れた宿 坊 しゆくぼう</p>	未指定	<p>大山講中を宿泊させた宿屋で、御師(現在の先 導師)の自宅を兼ね、屋内に阿夫利神社の分霊を 祀る神殿が設けられているのが特徴である。 宿坊は、大山の参道沿いに今も残り、現在まで 脈々と引き継がれている大山講の講中の宿泊は もとより、一般の来訪者にも宿や食事を提供して いる。</p>	
⑰	豆腐料理	未指定	<p>各地の大山講中から寄進された大豆を利用し、 大山の清水で作った豆腐の料理が参拝客に振る舞 われた。 もともとは精進料理であったが、現在では現代 風な調理を取り入れた地元の名物として定着し、 来訪者に提供されている。</p>	

⑮	大山こま	未指定	金回りが良くなるという縁起物で、大山の木地師により製作された大山土産のひとつ。現在も大山の代表的な土産物である。	
⑯	ほうじょうぼう 宝 城 坊 (日向薬 師) の「神木のぼり」	未指定	修験者が修行のための入山前後に行う儀式で、現在も宝城坊の春の例大祭において再現されている。 修験者たちが斧や弓で周囲を清めた後、5mほどのシイの木に登って安全祈願の書状を読みあげる。木から降りると護摩を焚き、火渡りが行われる。	
⑰	おおやま あ ふ り じんじゃ 大 山 阿 夫 利 神 社 やまとまい み こ まい の 倭 舞 ・ 巫 子 舞	県無形民俗	奈良春日大社伝承の舞で、現在も大山阿夫利神社の秋季例大祭などで奉納される。	
⑱	おおやま あ ふ り じんじゃ 大 山 阿 夫 利 神 社 のうきょうげん の 大 山 能 狂 言	市指定 (無形民俗)	大山に江戸時代から伝わる伝統芸能で、300 年を超える今も大山能楽社保存会により引き継がれ、大山阿夫利神社の秋季例大祭などで奉納される。	

構成文化財の写真一覧

①大山



②霊山寺(現・宝城坊)



②霊山寺(現・宝城坊の木造薬師如来両脇侍像)



②霊山寺(現・宝城坊の厨子)



③石雲寺



④大山寺



⑤大山寺(鉄造不動明王及び二童子像)



⑥阿夫利神社(現・大山阿夫利神社・下社)



⑥阿夫利神社(現・大山阿夫利神社・本社)



⑦比々多神社



⑧高部屋神社



⑨大山道の道標



⑩納め太刀



⑩納め太刀



⑪元滝



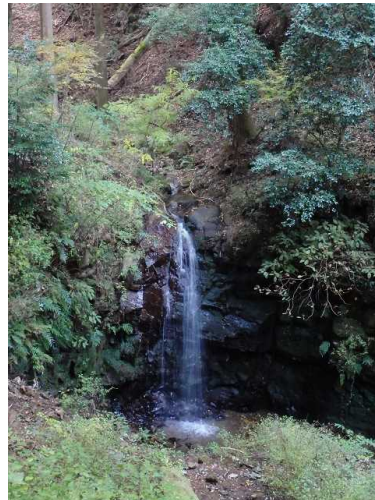
⑫良弁滝



⑬愛宕滝



⑭大滝



うたがわひろしげ
⑮浮世絵：歌川広重「五十三次名所図会
七南期(湖)左り不二」 安政 2 (1855) 年



ぜんほくさいいつ かつしかほくさい
⑮浮世絵：前北斎為一(葛飾北斎)「諸国
瀧廻り 相州大山ろうべんの瀧」 文政末頃



ごうんていさだひで
⑮浮世絵：五雲亭貞秀「相模国大隅郡大山寺雨降神社真景」 安政 5 (1858) 年



ごうんていさだひで
⑮浮世絵：五雲亭貞秀「大山良弁図」 元治元 (1864) 年



うたがわよしとら
⑮浮世絵：歌川芳虎「大山石尊大権現(仮題)」文久2(1862)年



うたがわとよくに
⑮浮世絵：歌川豊国「大當大願成就有が瀧壺」文久3(1863)年



とよはらくにちか
⑮浮世絵：豊原国周「見立水滸傳
當瀧壺」慶応3(1867)年



⑯参道沿いに建てられた宿坊



⑩宿坊(玉垣)



⑩宿坊(板まねき)



⑩宿坊(布まねき)



⑩宿坊(神殿)



⑪豆腐料理



⑪大山こま



⑭宝城坊(日向薬師)の「^{しぎ}神木のぼり」



⑯大山阿夫利神社の「^{やまとまい}倭舞」



⑯大山阿夫利神社の「^{みこまい}巫子舞」



⑰大山阿夫利神社の「大山能狂言」



(注) 写真は「能」

⑱大山阿夫利神社の「大山能狂言」



(注) 写真は「狂言」